



かもい岳スキー場は私たちの宝物

赤 平 伊 藤 幸 一

赤平スキー場の閉鎖

北空知の地域でもスキー場の閉鎖が続き、私たちが親しんだ赤平山も閉鎖されました。

指導員養成や講習会・検定会など仲間とともに取り組んだ思い出のスキー場でした。

スキー連盟の会員も、多い時で100名近くが在籍し、市内の体育協会の中でも最大の勢力を誇った組織だったのですが、現在では50名を切り、解散も検討課題に挙げざるを得なくなる状況に・・・

かもい岳スキー場

しかし、隣町にかもい岳スキー場があり、赤平の私の自宅からも15分ほどで通うことができ、赤平スキー連盟の仲間の多くが、シーズン券などを購入してこのスキー場を活用しています。赤平・歌志内・滝川・砂川市内などの小・中学校のスキー授業の場として、なくてはならない大切な場所となっています。多い日では、1500人余りの子供たちでごった返すこともあります。来年からは、中止になっていたスキー授業が赤平市の5つの小学校全てで復活するという、うれしいニュースが耳に入ってきました。

また、このスキー場には、癒しの効果もあるのかいい温泉があります。四国から来て冬期間滞在し、スキーを楽しんだり、大会のお手伝いをしてくれる山崎さんという指導員がいたり、胃の全摘手術をして、そのリハビリを兼ねて長期滞在をしている人もおります。

経営者の考え

スキー場の経営者の考え方が素晴らしく、特

に子供たちの競技大会を多く開催して、活躍の場を与えようとする姿には、敬服するばかり。

私は、サロモン大会、中体連全道大会など全ての大会で、コース係などの大会役員として参加しましたが、幼児や小学生が参加する「かもい岳ジュニア大会」を見るのが特に好きです。

体の三分の一ほどがヘルメットスタイルの幼児が、親の温かい視線の中で、進む方向を探しながら滑走する姿のかわいらしさは、なんとも言えないほほえましい光景です。こういう子供たちの中から、期待される強い選手が育ってくるのだと思います。奈井江中の工藤君は、コーチ陣の熱心な指導もあり、中体連の全国大会で回転・大回転の二冠に輝きました。

縁の下の力持ち

スキー場では、リフト乗り場で働く人達や事務室で事務を取る人達とも仲良くすることは、大切なことだと日ごろから思っています。

リフトに乗り慣れていない小さな子供達の乗り降りには、ケガをさせないように人一倍気を使いますが、仲良くしていれば係りの人も、特段の配慮をしてくれます。私はかつて学校の管理職についておりましたが、一番仲良くしなければならぬのは、教師より、事務職・用務員・給食調理員であると先輩校長から教えられたものです。これは真実でした。縁の下の力持ちを大切にしなければ、事は動かないし、こういう人達に気配りをし、ねぎらいの言葉をかけなければいけないと日頃から思っています。

学ぶ姿勢が大切

小・中・高校の子供達にスキーを教えていま

すが、人に物事を教える立場にある者は、弛まざる研修が必要であると考えます。マンネリ指導はいけません。私個人としては、研修会が毎年実施され、義務づけられることに大賛成です。

周囲の仲間に、スキー技術について気軽に質問しても、いやな顔をされたことは一度もありません。みんな快く教えてくれます。

見下したり、いやみを言う人には聞かなければいいのです。

今シーズンは、テクニカル・プライズテストに挑戦し、合格した赤平の指導員仲間がいるので、来シーズンは彼から大いに学ぼうと思っています。

脚を動かす

健康でいるためには、脳と脚を大いに使うことが大切です。全身の血流を盛んにするには、脳と脚を活発に働かせること。私は、左膝痛で苦しみました。筋肉を強化する運動療法でこ

れを克服しました。薬では治りません。脚を動かすことの大切さを楽しみじみと感じています。

これからはロードバイク、登山などで脚を鍛え、212キロを走る第30回オホーツクサイクリングにも、スキー仲間と参加する予定です。

免疫力を高める生活を

体を動かし、仲間と遊び、疲れたら寝る。

美味しいものを食べ、本や新聞をよく読み、妻や町内の人達と仲良く生活をする。

そして、かもい岳のスキー場で青空の下、澄んだ空気を胸いっぱい吸い込んで、カービングターンで高速滑走・・・生きていく醍醐味ではないだろうか。家に閉じこもっていたら必ず病気になるであろうし、冬期間大いに利用するかもい岳スキー場は、私の、私たち皆のかけがえのない宝物なのです。

(赤平スキー連盟 会長)

ことばの謂われ

●「一期一会」ってなに？

一生に一度限りの機会。

一期一会の語源は、「茶会に臨む際は、その機会を一生に一度のものと心得て、主客ともに互いに誠意を尽くせ」といった、茶会の心得からである。「一期」と「一会」をそれぞれ辿ると、「一期」は仏教用語で人が生まれてから死ぬまでの間を意味し、「一会」は主に法要などでひとつの集まりや会合を意味しており、ともに仏教と関係の深い言葉である。

●「四六時中」ってなに？

一日中。いつも。

四六時中は、もともと「二六時中」と言われていた。「二六時中」は、一日の時間を「子の刻」「丑の刻」など、干支の十二刻で表していた江戸時代の使われ方で、2×6で12となるため、一日中を意味していた。「四六時中」は「二六時中」を現代の一日の時間(24時間)に合わせ、4×6の24時間としたものである。